

長瀬隆の小説「微笑の沈黙」と「ヒロシマまでの長い道」および「樺太よ遠く孤独な」は
=「苦悩の共有」と「癒し」を表している

(1) いとうちあき

昨年11月29日の読売朝刊に載ったノーベル賞作家ウオレ・ショインカ氏と大江健三郎氏の対談(NHK教育TVでも放映)を読んで、直ちに私の脳裏に閃いたのが長瀬隆氏の小説であった。ピースピアNo. 86で久保文氏が「微笑の沈黙」(’95年晩声社刊)の内容を紹介したので読まれた方も多いと思うが、私は世界的な作家二人がそれぞれに語る「記憶する力によって」「二十世紀の傷を担う」「傷がテーマ」「民族主義の限界を超えて」「外へ向かう祈り」「正義は想像力で」「人間の絆信じる」「未来を形作る想像力を」等々の文学の使命に対し、それは世界の平和を希求している人々の交差点として在る、平和事務所の使命感にも通じるものでもあり、それらの人々にとって深く共感できる文学だと私は感じたのである。

「微笑の沈黙」は、重く疲れる小説である。物語によって引き込まれるようなものではなく、リフレインのように、繰り返される事象の断片によって読む者の思考は深まりはするのだが、現実の日常的な生活面での理解は遠ざかったり、近寄ったりしてくる独特な文章なのである。

ミステリアスのように感じられる「沈黙」の要因が次々と読者に問いかけてくるのだ。それは著者が自身に問うと共に読者の知性をも問うもので、意識的に「過去と現在」「事実と観念」を対比させている文体なのだ。

「微笑の沈黙」は著者自身でもあろう主人公北村高志が妻道子とわが子ツヨシとヒロシを得てからの記憶が中心であり、「ヒロシマまでの長い道」(’89年晩声社刊)は被爆者和子との結婚に至るまでの経緯と記憶が中心であり、また「樺太よ遠く孤独な」(’84年西田書店刊)は幼年時代の記憶から始まり、ヒロシマへと到達するのだが、不当に奪われた故郷樺太への想いが中心に語られている。それは十四才で<ストーイ・止まれ>とソ連兵に言われてから、ロシア貿易商社員の現在に至るまでも<止まれ>と言われ続けているような憤りの記憶でもある。

少年期・青年期・家庭と子をもった中年期に分け、それぞれの時代の「書く」こと、「書こう」とする「目標と内容の変貌」とその「契機」についてリフレインされている。

「樺太よ」の巻頭にはロルカの騎馬行の一部が示され「ヒロシマ」の巻頭にはデュラス「愛人」の抜粋が掲げられ「微笑」のそれには「わが老父母に捧げる」とあり、十数年の作家の軌跡をよく示しているように感じられる重厚な三部作である。

大江氏は言う、文学において書く人間が発揮する能力、読み手に呼び起こそうとする力は何だろうか？ それは記憶する力と創造する力ではないだろうか、と。

我々が生きている現在とは過去とつながっていて、「どこから来たのか」をはっきり確認し、受け止め、記憶する力が大切だ、と。同時に未来を構想し、自分の望む方向に現実をいくらかでも形づくっていく想像力を持たなければいけないだろう、と。

「微笑の沈黙」はこの課題に全くあてはまっているように私は感じたのだ、長瀬隆の三作品はそれに応えていると思ったのである。

著者長瀬は作品中でしばしば「書くこと」「書かなければ」「樺太を書くことは一ヒロシマを書くことである」と述べる。「樺太よ遠く孤独な」の最後は「・・・英知を学ぶとはどういうことだろうか。」と終わっている。

「微笑の沈黙」を読んで、私はこの難儀な小説から朗唱劇・木下順二の「子午線の祀り」を連想させられた。

「微笑の沈黙」は作者が以前に書いた「ヒロシマまでの長い道」および「樺太よ遠く孤独な」に連なる膨大な背景を含んでおり、「樺太のヒロシマの子」ツヨシが誕生する必然が重層して描かれている。

作者でもある主人公の我が子の誕生から死までを記憶と推量を駆使してとらえた新しいスタイルの小説であると解釈し、私は受読した。

平家物語から創造された木下順二の戯曲「子午線の祀り」のテーマは、知盛の「見るべき程のことは見つ、・・・」にありと解釈し、それに千鈞の重みを感じている私だが、「微笑の沈黙」からも同様なものを感じて、私は不思議に思っていた。

木下戯曲は十二分にドラマティックであり私たちを堪能させてくれるが、「微笑の沈黙は」そうではないからだ。

だが「微笑の沈黙」を読んでから、二月後に「樺太よ遠く孤独な」を読み始め156ページ(第4章予期せざる再会)至って私は刮目し理解した。「樺太よ遠く孤独な」は「微笑の沈黙」の十一年も前に上梓されているもので、樺太・北海道の戦前戦後を知る者の間に相当の反響を呼び起こしたものなのである。その156ページに可能なことは見ることに、そして記憶することだけであった。そのため私は『見さえすればよいのだ』と自分に言い

聞かせ、市場のロシア人と日本人の取引を眼に力を含めて見たものであった」とあり十四才の少年が人生の意味と未来を考え、「今の自分に何が可能か」と考えた姿があったのだ。村との別れを一人決意し、峠から風景を眼に焼き付けた少年の想いが全編を貫いていて、作品が「木下戯曲」のように私に感じられたのだろう。

自己の観念と「記憶」、自身の周囲に起きたこと、自身が起こしたこと、選択したことを「書く」ことの意味と重ね考え続け、四十一五十年を経て、文学作品として「樺太よ遠く孤独な」な「ヒロシマまでの長い道」「微笑の沈黙」などに結実させたのであろう。

これらを簡単に私小説・自分史と言ってはよくないのだが、現在のロシアのチェリノブイルまで出てくるのであり時代のまっただ中で苦悩し、観察し、分析し、自身の形成をも表現し得た格段の私小説ではないかと思う。

三作とも作者の自伝・自分史であり、文学者になろうとした青年が組織(大学・政党・会社)と心ならずも連なってゆき、その中で妻と子供を獲得する心の因果関係史とも読める。

これらの作品は大江氏やショインカ氏が問題にしている核時代の日本と世界の文学その哲学的課題に提示し得た一つの文学試案ではないかと考えさせられたのである。

ヒロシマと樺太、ロシアの覇権と崩壊等々と何百万もの人々が体験し、味合わされたであろう(――された――したとは述べず――であろうと表現する作者の文体は、過去と現在の比重を計っているかのように読める)真実を文章として表現したものとして私は感受した。

「微笑の沈黙」は、少年時代に芽生えたのであろう著述家的個性と、その生活、自分自身を形成した諸相を内面から分析し、重層した

世界として描き出すことに成功している。

「微笑の沈黙」は読む者に対して記憶を再生させるような特殊な力がある。(これぞ大江の希求する文学ではないかと感じたのだが)長瀬の文は文から私は自己の体験や記憶を想起し未来を構想したたことはないのだが)長瀬の文は過去・現在を考えることの好きな読み手、特に戦後の左翼的運動に連なった読者にとっては独特な魅力がある。

この小説の神髄部分は、終章の「沈黙の声のツヨシの別れの言葉」に凝縮されているものと私は痛感させられた。優しく、わかりやすく、詩的叙情を感じさせてくれる章だ。

人が生まれて、去っていくことの原因と結果を求める文学的・哲学的探索に対する一つの回答が提示されているように思える。

それは核の時代・現代の一典型でもあると思えるものだ。

樺太から始まる、幼年時代の混血者への想いから、被爆者である道子と出会う青年時代、そしてロシア語をよくするためにチェリノブイルにまで通訳として出かける体験の半生。

その背景や要因の膨大な記憶・印象が、三五八ページにも渡って分析され、説明づけられて作品として結実したものと思う。

三作品を読んで、重く心に残り、ある種の光明「癒し」を強く感じたのは「微笑の沈黙」である。重厚な筆触の油絵のような作品である。

これに比べると前二作は透明感を持った水彩画のようだ。それほど「微笑の沈黙」は重い。

デッサン・スケッチ・水彩画などがしばしば人の眼を奪い心を打つのは、画家の率直な眼が自己の腕を飾らずに描いた真実の描写力を示すばかりであり、「ヒロシマ・・・」にも「樺太・・・」にもそれは多分に示されている。

その印象を特に受けたのは「ヒロシマ・・・」の終章で作者自身が自己を評して

「彼の場合は生まれ育った土地から、またそこでの人々から切り離されて生きざるをえなかった者の宿命であり、偏向であった。彼は自分を確かめる手段を欠いて生きていて、そのために配偶者に被爆女性を選んでいたのである。そのような彼を矯正したのは遠淵村の同級生たちであった。彼は徐々に、後には急速に樺太人としての自己を回復したであろう。――とある。「偏向を矯正し回復した」と率直に人を信ずる温かさが伝わってくる。このように言えるまでの屈折と苦渋の経緯が率直に書かれている。

人によっては「ヒロシマまでの長い道」の方を高く評価するかもしれない。

また「樺太よ遠く孤独な」は少年時代の体験を中心にして当時の記憶と観念を描き、ヒロシマと樺太の共通性を自身の内面に獲得して、「書く」ことが可能になったものであり、著者の出発点・原点でもあろう。

少年の率直な眼と想いが解りやすく読みやすい。

「ヒロシマまでの長い道」と「樺太よ遠く孤独な」二作を土台にして到達したのが最近作の「微笑の沈黙」であり、この二作を書いたことで作家長瀬隆の到達したものが、「微笑の沈黙」の「癒し」であり「苦悩と傷の共有」であり、彼自身の書くことの必要性和必然になったものと私は考えるのである。

道子と出会った「旅」から二七年を経て、その旅に至る自身の軌跡「ヒロシマまでの長い道」を文章に置き換えることが可能になったのであり、それ以前の「樺太よ遠く孤独な」も書ける契機、主題が消滅寸前になって、それまでは沈黙(苦悩とその無意識の記憶抹消)

の時間が必要であったのであり、その経緯が明確に意識的に書かれたのが微笑の沈黙であり」この中で作家長瀬隆は「癒し」と「苦悩と傷の共有」に到達していると私は感じるし、それへの希求が書くことの必要と必然となっていると思う。



(2)

「微笑の沈黙」は物語りと共に書くことの意味・契機が物語の時間軸と空間と共に述べられている重層的な小説である。このためにリフレインが多く読みにくくなっている。

妻道子の病状は夫にとっても限界を二十回も超えた苦難であり、救いを求めるような「早く死ね」との思い、それを解っても死ねないし、自身の病因を被爆者だからだとは認めたくない道子、などについての短い描写。この箇所は強い迫力・アクチュアリティを感じる。

道子の病状がひどく、かつて美しかった容姿が失われ、「笑わぬ女」になっていた時期に27年前の「旅」に同行した男女の友人の見舞いを受ける。

「旅」によって北村と道子が結ばれたのを知る証人、でもある友人たちに励まされ、それが契機のように道子の健康が回復してゆく。

被爆者道子だけでなく誰もが、生きてゆく上で「証人」を必要とする時があるだろう。証人不在のために自滅することは多々あるのだ。

証人とは文学であつたり映画であつたり、様々な芸術作品として時代を生きる人々を救い、「癒し」をもたらすものであらうと私は思う。

白雪姫のように寝続け、「珍獣」のようになった道子にとって、昔の「旅」に同行し現在の夫を得る前の自分と夫も知る男女の友人は、彼女の貴重なアイデンティティそのものであっただろう。

文学にせよ映画にせよ、芸術作品は時代の証人でなければならず、同時代者を救い、「癒し」をもたらすものでなければならないと私は考える。

「微笑の沈黙」は妻道子とツヨシ(樺太のヒロシマの子)を触媒とした北村高志のアイデンティティ小説とも言える。

また、「微笑の沈黙」にはドストエフスキーなどによる自身の受けた文学の問題を具体的に詳細に示し、普通は作家が手の内に秘める課題についても述べられている。普通は別途に解釈され、青年期の重要部分として、独立させるようなものが、小説の一部として提示されている。

翻訳家としての一面をもつ著者の選れて学術的でもあり見逃せない部分でもある。

それは「樺太よ遠く孤独な」の中にも見られ、四五万人もの日本人が留まらずに樺太から逃げだしてしまった理由として、米・食生活のこと、その地で生まれ育った者が少なかったことなどの学術的分析や論理的説明が非常に説得力をもって「故郷を持つこと、喪失すること」の重要な意味を鋭く説いている。

松山隆と対比される岡田虎蔵教授とのかかわりや早稲田大学におけるロシア文学と学生運動、松山の「史的唯物論の根本命題」や遺稿について、そして主人公北村こと長瀬自身

の「ドストエフスキーの創造」の翻訳についてなど、この部分だけでも一冊の本になる問題が小説の主人公の重要な問題として述べられている。

実に入り組んで複雑かつ面白くもある総合的な一冊である。

ゴーゴリの「鼻」を模倣したドストエフスキーの失敗作の話も面白く、多くの連想を誘われた。

樺太からヒロシマに至る長瀬氏の内面、沈黙と「自分だけの世界」の時期とその在りよう、――それらを苦闘の末に文章に造形し開放したものと私は受け取った。

書くこと、描くこと、彫ること、紡ぐこと等々、人間は創造なくしては生きられないものなのだろうし、長瀬氏は少年の頃よりその特質・書くことの意識が生きることになり、生きて行くためには書かないではおられない格段の性質をもっていたのだろう。

三作品は、いずれも記憶を中心とした事物に対する認識を述べることの多い非映像的な文章からなっており、三作とも男性的で非女性的であり一方的すぎるような認識記述が多いようにも思える。

特別な男の観念的認識からなりたっている作品である。

子宮をもち子を生み、普通日常の現実を選択して生きている女の側からは、理解しにくい部分が多いのではないかとも思える。

結婚式を挙げても同居せずにいるので、新妻は耐えかねて、押しかけるように上京・就職してくるのであり、このように普通ではない生活をする、身勝手な北村の特徴も記述されておりこれは理解しにくい。

しかし、少年期に敗戦を体験し時代の変革

に加わろうとした人々には、故郷を奪い取られる渦中に棲み、ヒロシマの心に到達する北村高志(長瀬)の半生は共感するところが多いだろう。

彼の時間と空間を超えた認識、年月を経て造形化され、書かれた「微笑の沈黙」は重い実在感があり、その語るところは、雄々しく変革に加わった人々に対しては強い説得力をもっている。

それは時代の変革に参加し疲労し、「癒し」を求め、「傷」を造形化し得た、最も今日的な文学であり、作者の内面と対外認識を読者が共有できる、稀有な作品でもあるのだ。

一時期でも、変革の戦列に参加した記憶をもつ同世代とそれを引き継ぐであろう次世代にぜひとも読んでほしい三冊である。

上海

便り



須田 育邦

私は2年前に独立して以来、頻繁に上海に出かけます。一つは自由な時間を過ごすためであり、もう一つはビジネスを行うためです。中国語は30年前に東大の学生の時に、第2外国語として勉強し基礎はありましたが、独立後すぐに復旦大学に1ヶ月留学し、意外にも大勢の人から発音を誉められて使ううち、たちまち日常生活には困らなくなりました。帰国前に大胆無謀(?)にも、中国人向け住宅を友人になったばかりの中国人名義で購入する契約をし、頭金を払って帰国しました。中国の住宅は内装なしの居抜きの状態で販売されます。その後内装設備家具の購入など、